

社会的望ましさ反応尺度への回答の世代差

——Web 調査を用いて——

藤井 勉^{1,4} 澤海 崇文^{2,4} 相川 充^{3,4}

¹ 長崎大学大学教育イノベーションセンター ² 神奈川大学人間科学部

³ 筑波大学人間系 ⁴ 教育テスト研究センター

本研究では、自己欺瞞と印象操作の 2 つの下位尺度から構成される社会的望ましさ反応尺度の回答に世代差が見られるか否かを検討した。16 歳から 69 歳までの 1448 名の男女を対象に調査を行い、自己欺瞞と印象操作の 2 下位尺度の得点を従属変数、性別および年代を独立変数とした分散分析を行った。その結果、いずれの尺度においても年代の主効果が見られ、年代が上がるほど、社会的望ましさ反応尺度の 2 下位尺度の得点も高くなる傾向が認められた。本研究は Web 調査による横断的研究であるため解釈は注意を要するものの、この結果は、特に高年齢層に調査を実施する際に、その回答が歪む可能性が高くなることを示唆している。今後は、質問紙調査などでも同様の結果が得られるか否かを確認することが課題として挙げられる。

キーワード：社会的望ましさ反応、自己欺瞞、印象操作、世代差、Web 調査

1.はじめに

「あなたは、人をうまく利用したことがありますか」「あなたは、自分の人生を完全に思い通りに進めていますか」このように問われて、私たちは自信を持って「はい」と答えられるだろうか。もちろん、そう答えられる人も一定数は存在するかもしれないが、多くの人はためらいを感じるのではないだろうか。従前から、質問紙調査や面接といった自己報告式の調査には、こうした社会的な望ましさによって回答が歪められる可能性が指摘されている (e.g., Edwards, 1957)。もちろん、このような問題に対し、心理学は何ら手を打たずにいたわけではない。たとえば、調査時に回答者の社会的望ましさ反応を並行して測定し、分析時にはそれを統制したり (e.g., 澤田, 2009)、社会的に望ましい反応が多い参加者を分析から除いたりするといった方法が提案されている (レビューとして登張, 2007)。本研究では、この「社会的望ましさ反応」に注目する。

2.目的

本邦で社会的望ましさ反応を測定する際、これまでは Crowne & Marlowe (1960) を翻訳した北村・鈴木 (1986) の尺度が多く使用されていたが、近年は Paulhus & Reid (1991) の尺度を谷 (2008) が翻訳したバランス型社会的望ましさ反応尺度も使用されるようになってきた。これは回答者が本来の自己像と信じ、無意識的に望ましい方向に回答を歪曲する「自己欺瞞」と、相手に望ましい自己を呈示するため、故意に回答を歪曲する「印象操作」という 2 つの下位尺度からなるものである。この尺度を用いて参加者の社会的望ましさ反応傾向を測定し、主要な分析において統制する試み (山脇・山本・熊谷・大淵, 2013) も報告されている。

ところで、この社会的望ましさ反応は年齢層や性別による相違はあるのだろうか。もし、この尺度の得点が特定の年齢層や性において偏るならば、当該の年齢層もしくは性をター

ゲットとした調査において、社会的望ましき反応を積極的に測定し統制することによる分析精度の向上が期待できる。この点に関連して、谷 (2008, 調査 1) は、大学生を対象に調査を行い、自己欺瞞は男性の方が高く、印象操作は女性の方が高いことを示しているが、年齢層と性別の組み合わせ、すなわち交互作用については検討されていない。そこで本研究では、幅広い年齢層に対して社会的望ましき反応傾向の測定を行い、年代や性別による相違、そして交互作用がみられるか否かを検討することとした。

3.方法

3.1 参加者 インターネット調査会社の登録モニタ 1448 名 (男女各 724 名、年齢の範囲は 16-69 歳) が調査に参加した。この調査会社は年に 2 回、不正回答者の検出のためのトラップ調査を実施し、モニタの品質管理を行っている。したがって、モニタの質はある程度は保証されていると考えられる。

3.2 手続き 参加者は、調査会社を通じて案内された URL にアクセスし、社会的望ましき反応尺度 24 項目 (谷, 2008; 全くあてはまらない (1)—非常にあてはまる (5) の 5 件法) を含む複数の尺度に回答した。なお、全ての質問項目への回答を必須としたため、欠損値は存在しなかった。本研究の目的は社会的望ましき反応尺度の得点の世代差を検討することであるため、本稿はこの点に焦点を絞って報告を行う。

4.結果

4.1 各尺度の信頼性 まず、各尺度の相加平均得点を算出した。信頼性係数の推定値として Cronbach の α 係数を算出したところ、自己欺瞞尺度の $\alpha=.77$ 、印象操作尺度の $\alpha=.71$ という値が得られ、これらの尺度は一定の内的一貫性を有すると判断した。

4.2 相関分析 続いて、年齢と社会的望ましき反応尺度の 2 下位尺度との相関関係を検討した。年齢は自己欺瞞尺度と $r=.25$ ($p<.001$)、印象操作尺度と $r=.32$ ($p<.001$) と正の相関が有意であり、年齢が高いほど社会的望ましき反応が高かった。

4.3 分散分析 次に、年代 (10 代~60 代)×性別 (男女) の 2 要因分散分析を行った。その結果、自己欺瞞尺度に対して年代および性の主効果が有意であった (順に $F(5, 1436) = 20.08, p<.001, \eta_p^2 = .07$; $F(1, 1436) = 13.03, p<.001, \eta_p^2 = .01$)。年代における多重比較 (Tukey 法) を行った結果、自己欺瞞尺度の得点は 10 代、20 代よりも 40 代~60 代の方が有意に高く、30 代より 50 代、60 代の方が有意に高かった。また、40 代、50 代より 60 代の方が有意に高かった。加えて、自己欺瞞尺度の得点は女性より男性の方が高かった。印象操作尺度に対しては年代の主効果、性の主効果および両者の交互作用が有意であった (順に $F(5, 1436) = 35.49, p<.001, \eta_p^2 = .11$; $F(1, 1436) = 4.70, p=.03, \eta_p^2 = .003$; $F(5, 1436) = 5.86, p<.001, \eta_p^2 = .02$)。年代について多重比較を行った結果、印象操作尺度の得点は 10 代よりも 20~60 代が高く、20 代、30 代より 50 代、60 代の方が有意に高く、40 代、50 代より 60 代の方が有意に高かった。また、男性より女性の方が印象操作尺度の得点は高かった。単純主効果の検定を行ったところ、10 代では男性の方が女性より高かった一方、40 代、60 代では女性の方が男性より高いという結果が得られた。結果のグラフは図 1 に示すとおりである。

5.考察

自己欺瞞・印象操作尺度ともに年代が上がるほど得点が高くなる傾向が認められた。同様の傾向は、ドイツで行われた研究 (Stöber, 2001) においても報告されており、本研究も同様の結果が得られたといえる。横断的研究のため解釈は注意を要するが、本研究は、特に高年齢層に調査を実施する際、その回答が歪む可能性が高くなることを示唆する。したが

って、こうした年齢層を対象に調査を行う際には、社会的望ましき反応を並行して測定して統制することで、分析の精度をより高められるかもしれない。

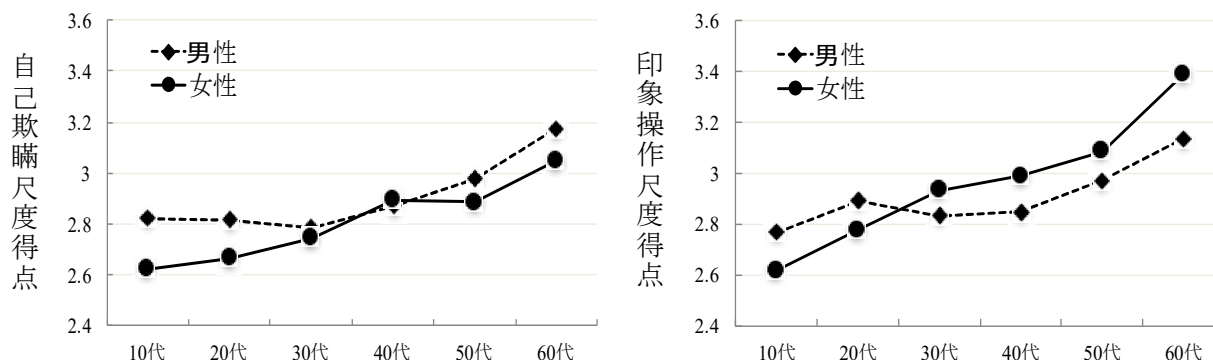


図 1 自己欺瞞尺度 (左) および印象操作尺度 (右) の年代別の得点

次に、自己欺瞞尺度の得点は男性の方が有意に高く、印象操作尺度の得点は女性の方が有意に高いという結果は、谷 (2008) の知見とも一致するものである。さらに、本研究では印象操作尺度においては年代と性別の交互作用も認められ、10代では男性の方が有意に高かったものの、その平均値は30代では逆転し、40代、60代では女性の方が男性より有意に高いという結果も示された。ただし、大学生を対象とした谷 (2008) の調査1 (参加者の平均年齢は男性 20.27 歳, $SD=2.67$ 歳, 女性 19.94 歳, $SD=1.55$ 歳) では、印象操作尺度の得点は女性の方が有意に高かった。今後は、これらの結果が Web 調査に特有のものなのか、それとも実際の質問紙調査においても同様なのかを検討し、本研究の知見が頑健であるか否かを確認することも重要である。

参考文献

- Crowne, D. P., & Marlowe, D. (1960) A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24:341–354
- Edwards, A. L. (1957) *The social desirability variable in personality assessment and research*. New York: Dryden Press
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986) 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, 9:173–180
- Paulhus, D. L., & Reid, D. B. (1991) Enhancement and denial in socially desirable responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60:307–317.
- 澤田匡人 (2009) 小中学生のいじめに対する態度とシャーデンフロイデ 日本心理学会第 73 回 大会発表論文集, 1010
- Stöber, J. (2001) The Social Desirability Scale-17 (SDS-17): Convergent validity, discriminant validity, and relationship with age. *European Journal of Assessment*, 17:222–232
- 谷伊織 (2008) バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17:18-28
- 登張真稲 (2007) 社会的望ましき尺度を用いた社会的望ましき修正法: その妥当性と有効性 パーソナリティ研究, 15:228-239
- 山脇望美・山本雄大・熊谷智博・大淵憲一 (2013) 攻撃性の顕在的・潜在的測度による攻撃行動の予測 社会心理学研究, 29:25-31